

ブリヂストン久留米工場

1934年(昭和9)久留米工場をたて、本格的にタイヤの生産をはじめた。



久留米城跡

1960年(昭和35)城跡を整備し、有馬記念館、東郷記念館、茶室千松庵などをたてる。



久留米市には、ふるさと久留米を楽しい文化都市にしたいと願った、石橋正二郎の思いを伝えるゆかりの施設や場所がたくさんあります。

● 石橋正二郎 ゆかりの地 ●

石橋記念くるめっ子館

1957年(昭和32)市長公舎としてたて、市に寄付。2002年(平成14)から子どものための施設としていろいろな活動をおこなっている。



櫛原記念館(非公開)

1930年(昭和5)秩父宮殿下ご夫妻の久留米ご滞在中の宿舎としてたてられたもの。

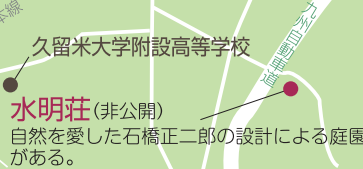


千栄禅寺

石橋正二郎の墓がある。1959年(昭和34)に本堂庫裏を寄進。ステンドグラスの窓を使った本堂の内部やその外観には、合理性と独創性を感じる。



石橋正二郎の胸像がある。



水明荘(非公開)

自然を愛した石橋正二郎の設計による庭園がある。



石橋正二郎記念館

2016年(平成28)11月開館。



ブリヂストン通り

1955年(昭和30)市に寄付。季節ごとにいろつくケヤキのある道は市民に親しまれている。また通りには記念碑がある。



久留米大学

1928年(昭和3)九州医学専門学校(今の久留米大学医学部)の土地や建物を寄付。設計にも参加した。大学内には石橋正二郎の銅像がある。



石橋迎賓館(非公開)

1933年(昭和8)石橋徳次郎の私邸としてたてる。



梅林寺

開山350年記念に梅園などをつくり1958年(昭和33)に寄進する。



17歳の頃の石橋正二郎。



石橋文化センター・石橋文化ホール・久留米市美術館

石橋文化センターの正門壁面には「世の人々の楽しみと幸福の為に」と刻んである。



世の人々の楽しみと幸福の為に 石橋正二郎の生涯

石橋正二郎は久留米市で生まれた郷土の偉人です
「純正国産タイヤ第1号」を製造し
人を愛し、自然を愛し
久留米を「楽しい文化都市」にしたいと願いました



石橋正二郎名誉市民顕彰会

石橋正二郎は、久留米の地でブリヂストンをつくり
日本を代表する会社に育てあげました。
また、人々の幸福について考え地域や社会につくした人です。

名誉市民 石橋正二郎 の一生

1889年(明治22年)、石橋正二郎は久留米に生まれました。その年は私たちの久留米市が誕生した年です。

17才で家業の仕立物屋をつぎ「全国的に発展するような事業を行い、そして世の中のためにやりたい」と理想をかげました。そして地下足袋や自動車タイヤ製造など、当時の世の中の一歩先に行く事業をはじめました。石橋正二郎が生きた明治、大正、昭和の時代は戦争や大不況など困難なことが起こりましたが、知恵と努力で新しい道を切り開いていきました。

また、ふるさと久留米を「楽しい文化都市にしたい」と願い、石橋文化センターや石橋美術館、久留米の小・中学校にプールを贈ります。

「世の人々の楽しみと幸福の為に」という初心を、一生ゆるがぬ信念としてつらぬきました。

みなさんも、これからの学習や仕事のこと、家族や友だちを思いやることについて考えてみましょう。

0才1889年(明治22)

久留米市本町に、生まれる
父の徳次郎、母まつの子男に生まれる。父は正二郎が3歳のとき、「お仕立物 志まや」をはじめる。

6才1895年(明治28)

莊島尋常小学校に入学
「学校に行きたい」と望みながら、体が弱く学校にあまり行くことができませんでした。
※莊島尋常小学校とは今の莊島小学校のことです。

12才1901年(明治34)

久留米高等小学校で、坂本繁二郎から図画を教わる

坂本繁二郎は久留米の画家です。後に国から「文化勲章」をささった人です。



17才1906年(明治39)

久留米商業学校を卒業

「仕事をする中で世の中のためにすることをしよう」と決心する
正二郎は進学を希望していました。しかし、父の願いをうけて兄の徳次郎と家業の仕立物屋を継ぎ仕事をすることにしました。勉強は続けられなくても「仕事をする中で世の中のためにすることをしよう」と決心します。



18才1907年(明治40)

足袋を専門につくる「志まやたび」の店をつくる

シャツやズボンなどたくさんの種類をつくる仕立物屋から、足袋一種類をつくることで効率を良くしました。19才で店のとなりに小さな工場をたて機械も取り入れました。また、当時の商家で無給で働くことが普通だった徒弟制度をやめ、給料を払うようにしました。

23才1912年(明治45)

九州で一台しかない
自動車広告

「人が考えないことをしよう」と自動車で広告するアイデアがひらめました。九州を一周し大評判になりました。



25才1914年(大正3)

どのサイズも同じ20銭「アサヒ足袋」を発売する

当時、足袋はサイズによって値段が違いました。どのサイズも同じ値段。これは全国ではじめての売り方でアサヒ足袋はたくさん売れました。

34才1923年(大正12)

ゴム底の足袋「アサヒ地下足袋」をつくる

不況で足袋が売れなくなりました。みんなでアイデアを持ちより、労働する人がはく丈夫なゴム底の足袋をつくりました。



39才1928年(昭和3)

今の久留米大学医学部の創立にあたり、
土地や校舎を寄付する
会社を大きくするのと同じように久留米の発展を大切に考えていました。



41才1930年(昭和5)

「国産の自動車第1号タイヤ」をつくる

将来必ず、自動車が多くなり、品質のよい安いタイヤが必要になると予想していました。日本で初めてタイヤをつくることは大変なことです。正二郎と社員はタイヤ製造の技術を研究し、一丸となって努力しました。そして、ついに国産タイヤ第1号がつけられました。



社名は石橋正二郎の姓、石(ストーン)橋(ブリッジ)を逆さかさまにした「ブリヂストン」

42才1931年(昭和6)

ブリヂストンタイヤ会社をつくる

自動車タイヤを生産し販売を開始する。ブリヂストンタイヤ会社は今のブリヂストンのことです。

45才1934年(昭和9)

ブリヂストン久留米工場をたてる

48才1937年(昭和12)

「日本一、世界でも大きい会社」にすると決心し、ブリヂストンの本社を東京に移し、家族と東京に移る

56才1945年(昭和20)

太平洋戦争が終わって、わずか2ヶ月でタイヤの生産を再開する戦争で大半の工場を失い、タイヤをつくる天然ゴムも国内にあまりありませんでした。知恵と行動力でタイヤ生産を再開させました。

61才1950年(昭和25)

世界の新しい技術を取り入れて「より良い自動車タイヤ」をつくりたい
グッドイヤー社と協力関係をきずくためアメリカに行く。このときアメリカで有名な美術館をみてまわり、美術が人々の心を豊かにしてくれると感じました。



63才1952年(昭和27)

東京にブリヂストンビルをたてる
ブリヂストン美術館を開く

66才1955年(昭和30)

ブリヂストン通りをつくり久留米市に寄付する

67才1956年(昭和31)

石橋文化センターをつくり久留米市に寄付する

久留米を明るくしたい、楽しくすごす場所をつくりたいと、ブリヂストンができて25周年を記念して石橋文化センターがつけられました。開園の日、市内をパレードしてきた石橋正二郎を2万人の市民が迎えしました。石橋文化センターは市民への「夢の贈りもの」でした。



石橋美術館を開く
財団法人石橋財団をつくる

集めた絵をたくさんの人に観てもらい、共に楽しむことにしました。

また、正二郎は図画の先生だった坂本繁二郎と青木繁の友情に感動し、二人の絵を集めて美術館で公開しました。

久留米市より名誉市民の称号を受ける

68才1957年(昭和32)

久留米市の21校の小・中学校にプールを寄付する

子どもたちに体をしっかり鍛えてほしいと学校にプールを寄付しました。



74才1963年(昭和38)

石橋文化ホールをつくり寄付する

77才1966年(昭和41)

久留米市民より「感謝たて」が贈られる

80才1969年(昭和44)

東京国立近代美術館をつくり寄付する

82才1971年(昭和46)

石橋文化センターの日本庭園をつくり寄付する
日本庭園の寄贈式に出席。この時がふるさと久留米に帰った最後となりました。

87才1976年(昭和51)

胸像を久留米市より贈られる
米寿を祝い、胸像が五穀神社内にたてられました。

9月11日、東京で亡くなる
10月5日、市民葬が行われる

石橋正二郎を慕った4千人もの久留米市民に見送られました。

